

土地・法・不安：「開発」に揺れる人びと

松岡，陽子
名古屋大学大学院文学研究科

<https://doi.org/10.15017/2344478>

出版情報：九州人類学会報. 38, pp.21-22, 2011-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

2010 年度セッション A

土地・法・不安
—「開発」に揺れる人びと—

松岡 陽子 (名古屋大学大学院文学研究科)

キーワード: 土地、法、不安、コンフリクト

本稿は2010年10月30~31日に開催された第9回九州人類学研究会オータムセミナー・セッションA「土地・法・不安—『開発』に揺れる人びと」の報告である。本セッションは、「不安」にまつわる問題をまとめた特集であり、各発表者たちはその土地がもつ固有の性格ゆえに起こる住民たちの葛藤や、土地をめぐるコンフリクトを主題として、都市(土地)計画、法、社会秩序などを論じている。

発表は下記の順で行った(敬称略)。

- 1) 松岡陽子「希望のない土地: ケニア農村地帯に成立したスラム」
- 2) 清水貴夫「茶会がつなぐキズナ: 都市計画による離散を乗り越える人びとの営み」¹⁾
- 3) 高野さやか「土地をめぐる期待と不安: インドネシア・東スマトラの土地紛争における争点の移動」
- 4) 木村周平「都市計画、不安、人類学(者): トルコ、イスタンブールの耐震都市計画の事例から」
- 5) 石垣直 コメント

松岡は戦争や土地改革など特異な土地形成過程を経て、ケニア農村地帯に出現したスラムやその住人たちに焦点をあてている。スラムでは現在や未来に対する不安が住人の暮らしを支配しているにもかかわらず、彼らは意図せずしてそれを受け入れているばかりか、積極的に不安を選択している状況を報告した。

清水はブルキナファソの首都ワガドゥグで実施された都市計画を扱い、人と人

との紐帯がいったん崩れたものの、茶会をとおして新たな絆を築き、地縁的なつながりを再構築しようとする人々の営みが報告されている。松岡の報告では不安は次の何かを生み出す原動力になっておらず、人々は不安である状態に積極的に身をまかせているが、一方で清水の報告では不安というものが次のステージへとつながる動因となっており、両者は対照的な事例となっている。

高野はインドネシアの土地紛争問題を扱い、裁判の行方に揺れ動く住民たちの「未来に対する構え」に焦点をあてている。それらは期待と不安というかたちで具現化され、法の決定とともに学習されていくものである。彼女は制限されながらも未来を想像/創造しようとする住民たちの取り組みについて論じている。

木村はクリフォードなどの手法を採用しながら、トルコの都市計画の進行過程に焦点をあてている。都市計画はさまざまな位相において進められているが、一つ一つの取り決め自体が明確な決着のもとで行われるわけではなく、不安を抱きながら実行され続け、成立したものである。彼はそうした一つ一つの過程をもう一度丁寧に紐解くことによって、実は表向きはスポットライトがあてられていないが、未来につながるなんらかの可能性が潜んでいるのではないかと、事態の不確定性を重視しながら、希望を見出そうとする。

このように、我々の「不安」のとらえ方はばらばらであり、明確な共通項を見

出すことはできなかったが、今回のセッションは我々全員の「不安」に対する挑戦であった。想定される未来、希望される未来、もしくは想像しえない未来などといった、まだ完了していない事態が「現在」を生きる当事者や関係者たちの行動や発言、そして志向を限定している。その中心にあると思われる「不安」を抽出することが我々の今回の課題であり、「不安」をめぐる議論の第一歩となっただろう。

また、未来に続く発展という意味をこ

めて、『開発』に揺れる人びと」というサブ・タイトルをつけた。「不安」を考えることが、なんらかの未来を切り開く契機となることを願って、今後も議論を重ねていきたい。

註

1) このタイトルは発表時のものであり、本誌掲載の清水論文のタイトルは内容とともに一部、変更されている。

(2011年6月7日 掲載決定)